

『笈の小文』一考察

安 藤 桂 子

はじめに

『笈の小文』は、芭蕉没後十五年後の宝永六年板乙州本を唯一の信頼すべき本文としているが、真蹟・伝本などが発見されない為に、これまで様々な論議を呼んできた。自撰集の問題、紀行文名に関する問題、成立時期の問題等は文学、以前の書誌的事項であり、ここに研究され尽くされた感がある芭蕉文学にも問題が提示されていた。

この小論では、『笈の小文』中の句に焦点をあて鑑賞を通して制作過程を考え、更にそれらの句を分類し、その結果、全体を把握し一紀行として如何なる位置にあるのか、宝永板をもとに、関連するあらゆる撰集を見ながら述べてみたと思う。

一 推敲過程に見る句の位置

『笈の小文』中の芭蕉発句総数は五十三句である。その中で一句毎について異形句の見られるものは、別案なる句を除いて二十六句と全体の約半を占めている。そこで、それら異形句が成案と認めら

れる句になるまでの形成過程に如何なる詩作手段・方法をもって推敲されたか考察して見た。これは、推敲方法によって一句の文学上の位置づけがなされ、更に異形句を持つ二十六句全ての位置づけを見ることによって『笈の小文』そのものの位置づけが出来るのではないかと言う臆測からである。

先ず、推敲過程の方法によって分類すると三分類になる事に気づく。

I 一句既成の助詞に推敲過程の見られる句

II 一句既成の語順移動（転倒）に推敲過程の見られる句

III 一句既成の語句の変化により推敲過程の見られる句

更にⅢに関しては、あまりに漠然としている為に詳細に分類する必要があると思われる、三分類して見たのが次の分類である。

イ 一句の韻律の為に同意語の選択を行なったもの（言葉の遊びすま的なもの）

ロ 一句の対象に対する発想方法の変化によるもの（ロに関して更に分類した）

a 対象の具象化

b 主観的把握から客観的把握への脱却

c 情景描写から心境への移行

ハ 一句中の俗語を正したもの（理からの脱却・詩的世界への導入手段）

以上前述の分類方法に則して作業を行なったが、一句は必ずしも一分類に属するものとは限らず、特にⅠ・Ⅲは併用する場合が多い。Ⅰ・Ⅲの併用した句はⅢの中に分類し、その中で考察する方法を採った。

Ⅰ 一句既成の助詞に推敲過程の見られる句

①①月見ても物たらずや須磨の夏 笈の小文

②月を見ても物たらずや須磨の夏 小文庫・泊船集・花の雲

『芭蕉句集』（『日本古典文学大系』）には、「どちらを採るべきとも定め難い」とあるが、ここでは②を初案とし①を再案とする。②は上五の字余り、助詞「を」を使う事によって説明的なものになっている。助詞を省いても意が通じる句であるから、敢て定型五音を破る必要もない。この句の場合は助詞を省略する事によって推敲されたと言える。①②ともに、中七に切字「や」を用い二句一章と句に深みを増幅させる。しかし、芭蕉における切字観なるものは俳諧史全てに適応されるものではなく（注）従って芭蕉が意図した切字であると断定は出来ない。以後、切字は一般的なものとして考察して行く事を、ここで記しておく。

②①須磨のあまの矢先に鳴か郭公 笈の小文

②須磨の蟹の矢さきに啼や郭公 泊船集

中七の助詞に見られるもので『芭蕉句集』の頭注に②の「啼や」は誤りと記されているが、出典が『泊船集』だけに、この句も異形句としてここに掲げた。初案と考えられる②は、切字に当る「や」を用いているが、ここでは疑問の意の係助詞と解する。また一句の意味を考えあわせると②ではなく①でなくては意が異なってしまう。漁師の射る矢先を掠めて鳴いたのは、郭公であるか、と半ば詠嘆であるのに②では疑問でしかない。文法的訂正とも言える。

③①須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ 笈の小文

②須磨寺に吹ぬ笛きく木下やみ 續有磯海

上五における助詞の異形で、初案と考えられる②は格助詞「に」を用いて①よりも場所の設定が明確であり、上五の場所を更に範囲を狭くし固定して詠んだ座五の「木下やみ」という場が生きてこない。①では、切字「や」を用いて、須磨寺での詠句である事を強調しながらも、韻律的效果で座五の「木下やみ」を浮き立たせていると言える。また切字を用いる事によって二句一章となり、句の世界を広げている。

Ⅱ 一句既成の語順移動（転倒）に推敲過程の見られる句

④①月はあれど留守のやう也須磨の夏 笈の小文

②夏はあれど留守のやう也須磨の月 芭蕉遺集・眞蹟集

典型的な語の転倒である。「夏」「月」の一語の転倒によって句のイメージが異なる。須磨の風情については『笈の小文』文中にも、

かゝる所の秋なりけりとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさいはむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをもいひ出べき物と思ふぞ我心匠の拙なきをしらぬに似たり。

と、秋に趣があるとしている。秋の最も風情ある、あの秋の季題ともなる月を、この須磨で見ただれども、夏では物足らないと感じた句である。②では夏に主体がある。ここでは前述の意味からしても①でなくては句自体が解しにくい。故に②を初案とし、語の転倒によつて推敲された再案であり成案を①とする。

Ⅲ 一句既成の語句の変化により推敲過程の見られる句

イ 一句の韻律の為に同意語の選択を行なったもの（言葉の遊び的なもの）

⑤①寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき 笈の小文

②寒けれど二人旅ねはおもしろき 笈日記

③寒けれど二人旅ねぞたのもしき 曠野（知行子）

中七と座五に推敲の形跡が見られるが、一単語のニュアンスの違いからくるものであると思われる。初案②「は」と、再案③・三案で成案とされる①の「ぞ」との助詞による違いは前者は係助詞で一章に成しているが、後者は切字の働きで二句一章となっている。これは一句一章の、その性格からして散文的なものであるのに対して、二句一章は一句中に屈折を与え深みのある味わい深いものとして読みとれる。更に②③の「旅ね」に対して①の「寐る夜」は、上五が推敲過程上一貫して使われている「寒けれど」と言う感覚的語

を捨て難く直叙している心境を思うと、前者のものより後者の方がより実感の籠もった語として我々の感性に訴えてくる迫力があると言える。座五の「おもしろき」について、この語は如何に解すべきであろうか。ここでは「おもしろし」と言う原義に立ち返って、目の前が明るくなると解してみる。即ち、一人旅立った芭蕉に杜國という連れが過ぎ、たとえこの旅が諸家の解かれる様な旅であつたとしても（注）旅そのものが現代の我々の言う旅とは違ったものである事を考えあわせると、この寒く心細い旅寐も二人になって、この先道中が開けたようだと、と解す。或るいは話し相手が出来て楽しいと解すか。いずれにしても現実体験として第一声は、この「おもしろき」であつた。しかし、再び上五を考えあわせると「頼もしき」以外の何ものでもない。推敲は以上様な点から行なわれたと考えられるが、一種のニュアンスの違いで未だ推敲そのものに値しないと思われる。主観的、しかも感覚的な言葉の域から脱していない所にその点があるとし、この分類に入れたものである。

⑥①ふるさとや臍の緒に泣としの暮 曠野（笈の小文・泊船集）

②ふるさとや臍の緒なかむとしの暮 若水

中七に変化が見られる。中七の「なかむ」「泣」については初案②動詞＋助動詞よりも、再案で成案とされる①動詞は必然的に動詞止めの方が実質的意味合が濃厚となる。①②共に上五の切字「や」と座五の名詞止めで二句一章の典型的句形を形成している。

⑦①何の木の花とはしらず句哉 笈の小文（杉風館書簡・菊のちり）

②何の木の華ともしらず句ひかな 名月集

③何の木の花もしれぬ匂ひかな 反古集

ここでも中七においてのみ異形が見られる。分類Ⅰにおいて見るべき異形句かも知れないが動詞の活用語尾にも変化が見られる為、敢てここに分類した。『芭蕉句集』に記されている『花はさくら』に初案を①とし、再案を「花ともしらず」としているという記述がある。しかし再案の句形は①②③のいずれの句にも無く、出典が明らかではない。推敲順序も様々に考察出来るが、第一に①の句が杉風宛書簡（元禄元年二月中旬筆）に見られ、②③の出典は、いずれもこれより時代の下つたものである点からして、また第二に助詞「とは」は「とも」より理に適った表現に陥りやすい点、第三に『花はさくら』においても①と同句形を初案とする点、以上三点からしても①が初案であると考えられる。①が初案で成案ならば②③は共に誤伝であろうか。『花はさくら』の記述を考えあわせると、この出典で再案とする句形に近い③が三案で②が③以前、①以後の推敲であると考えられる。②を再案とする。③は①よりも何の木かわからぬが漂う馨しさを表現しているし、座五の切字「哉」の一句一章に加えて韻律を滑らかにしている。故に三案を成案③としても良いのではないだろうか。しかし、ここでは前述の出典に従っておく。初案で成案ならば、これら②③の異形句も推敲には値せず虚しい努力でしかあり得ない。従って、この句は言葉の遊びとしての分類に入れた。

⑧①物の名を先づとふ声の若葉哉

笈の小文

②物の名を先とふ萩の若葉哉

笈日記泊船集・真蹟

中七の「芦」「萩」の一語の違いである。『芭蕉句集』には「芦」「萩」いずれとも決め難い」とある。古歌「物の名も所によりてかはるなり、難波の芦は伊勢の浜萩」を踏まえての句である以上、この句の詞書に「龍尚舎」と伊勢の神官の名が見え伊勢での吟詠である事などを考え合わせると、今でも此、伊勢の地では古歌に詠まれている如く萩とこの若葉を呼んでいるのですか、お聞かせ下さい、と尋ねた句であると思われる。よって最初そこで称されている名で一句を仕立て更に別の呼称で考えられる語に置き変えたと見るべきだろう。②を初案、①を再案と解した。言わば、どちらでも良かった一語の変化は古歌からも解せる如く、それだけ遊びの要素が濃厚であると言える。

⑨①いも植て門はむぐらの若葉哉 笈の小文②藪椿門はむぐらの若葉哉 笈日記泊船集真蹟

②やぶ椿かどは律のわかばかな
③は同句形であるが詞書が僅かに違ふ事から（注3）列挙したが、推敲を考える際にあっては②③④として解する。上五のみの変化である。①②共に季題の重複の感があると言える。①は上五「いも植て」↓芋で秋、中七・座五に渡つてある「律の若葉」↓春。②は「椿」↓春、①同様に「律の若葉」↓春。発句において季題は一つである。にも拘わらず重複を感じさせる句を詠み得たのか。重複あるいは重複感を与える句自体、推敲度の低い初期のものではないだろうか。②の上五より①の上五の方がより草庵らしさが出る。リズムが加わる。この句も韻律的なものを求め、イメージを追い求めた

ものと言えるだろう。

㊦①御子良子の一もと床し梅の花

芭蕉 猿蓑(笈の小文・泊船集)

②梅稀に一もとゆかし子良の館

真蹟

純粹にⅢに属するものではないが一応この分類に入れた。初案②は上五の「稀」、中七の「一もと」「ゆかし」と因果的傾向が強すぎる。稀なるものは、一つしかない少数を示す語であるし、稀なるものであるから、ゆかしさがある。ゆかしさを強く句に打ち出させたい心境は解せるが、この様に続くとかえってゆかしさが薄らいで理に適った句となり詩情性に欠ける。再案①においては、表面的に②の語順が入れ替わった様であるが②のマイナス要因は消失し推敲に成功した句となり得ている。韻律的にも整っている。

㊦①春雨のこしたにつたふ清水哉

笈の小文

②はる雨の木下にかゝる雫かな

はせを 小文庫(泊船集)

中七・座五に変化が見られるが『芭蕉句集』に②は誤伝かとある。しかし、ここでも一応異形句がある以上は、本稿の対象として扱って見た。②の中七の「かゝる」この語は「掛ける」と他動詞に置きかえて見るとよく解せる。春雨の雫が木下に降り注いでいるイメージがする。「かゝる」と言う言葉自体に動性があるとも言える。①は、これに対して上五の春雨の静かなイメージと相對似して一動なる情景を詠んでいるが―そこには静なる世界がある。座五に関しては、この句の詞書に「苔清水」とあり、とく／＼の清水での吟詠である事を思うと①でしかあり得ない。また前述した『芭蕉句集』の②に対する推測に関しては、②には詞書がなく、故にそのまま①

に当てはまるとは言い難い。よって一概に誤伝とするには早計であると思う。五年前の「甲子吟行」から再度の訪れであり、再び句を詠み得たのではあるが、以前の句、

露とく／＼心みに浮世すゝがばや

と比較する時、この句が上五・中七の二箇所字余りの見られるのに対して①においては破調はなく十七字の詩型に詠み得る事が出来ている。ここに芭蕉の詩作上の過程の一端が伺える。②から①への推敲と考えるなら背景も①には深遠な世界があり、韻律も整っている。

㊦①一ツぬひで後に負ぬ衣がへ

笈の小文(前後園)

②ひとつぬぎてうしろにおひぬころもがへ

はせを 蕉影余韻(真蹟写)

③一つ脱てうしろにおひぬ衣更

續別座敷(曠野・秋津島・鯛魚莊図録)

④一つ脱でせなに負けり衣がへ

小文庫

上五・中七が異なる。上五に関しては「脱ぐ」という動詞四段活用のもと、音便の形を採っているものと分かれる。③④は「脱」に、ふり仮名がないが助詞「て」の清濁を考えると③は「ぬぎて」、④は「ぬひで」となる。活用形そのままの句②③は動詞連用形＋接続助詞、この形でイ音便となった句が①④である。音便の形を踏んでいる事は換言すれば口語的であると言える。この点からみれば文語的である「ぬぎて」の語に「ぬひで」よりも推敲の形跡が見られる。④が初案とされるものであるが、これは中七からの見解であろう。中七にポイントを置くと、A列(④)とB列(①②③)とに分かれる。「せな」と「うしろ」の違いである。Aについては「負う」と

言う動詞に背負う意が含まれている事から、わざわざ十七字の貴重な句の中に説明的に表現する必要はないと言える。Bは漠然とした語を使う事によってAよりは、その点で救われている。この句は衣替えの風変りな方法を詠み得る事によって佗びた旅の様子を出し、それはまた詩材として適し、一興あるものとして扱われたに過ぎないと思う。因って、同意語の遊びあそび的なものからは進歩し得なかったのではない。上五の字余りと言う韻律上からもマイナスであるのに推敲過程上何ら変化は見られない。「一つ脱ぐ」と言う意を表現する語は、この言葉しかなかったのであらうか。音便の形から脱却するのみであったのか。定型五音に収めようとすれば同内容の言葉を使って、或いは中七・座五などを更に考察した上で定型を保つ事が出来たのではない。この句は、比率的には他の句に比べて異形句が多い。しかし前述からの意味合において遊びで終わってしまったと言える。次に推敲順序であるが、初案は④、上五に音便形を用いているので前述の音便の考察から④を初案とする。再案はB列の中のいずれかであり違ひは上五のみである。『芭蕉句集』では①を成案としているが、①の上五が④と同様に音便形である以上、再案とし、三案を②③（仮名か漢字か、表記上の違いのみで同一句形である）とする。ここで問題となる事は、初案、再案、三案と順序立てて見た場合必ずしも三案が成案とされないと言う事にある。なるほど成案とされる①は他の三句より一句が滑らかに詠める。しかし音便の問題に適わず①を採れば今までの記述が壊れてしまう。一体どこに原因があるのだらうと考えて見る時、取りも直さず俳諧そのものの文学上の位置にある。俗の中に生まれ、その俗を正す事によって文学と芸術の世界に踏み込む事を可能にした詩であるからと言えるだろう。では、どこまでが俗を正した部類に属するのか。音便形の使用は当時俳壇において、どの様な位置にあったのか。この問題については定かではないが、ここでは主旨ではない為、問題提示に留め置く。参考までに同じ「脱ぐ」を使っている句が詠まれていたの一句掲げておく。

もの文学上の位置にある。俗の中に生まれ、その俗を正す事によって文学と芸術の世界に踏み込む事を可能にした詩であるからと言えるだろう。では、どこまでが俗を正した部類に属するのか。音便形の使用は当時俳壇において、どの様な位置にあったのか。この問題については定かではないが、ここでは主旨ではない為、問題提示に留め置く。参考までに同じ「脱ぐ」を使っている句が詠まれていたの一句掲げておく。

うぐひすの声に脱ぬたる頭巾哉 （津島 同 市柳 曠野 巻之二・初春）

③①若葉して御めの雫ぬぐはゞや （笠の小文）

②青葉して御目の雫拭ばや （翁 笈日記〔泊船集〕）

上五、一語の推敲である。①②いずれを初案とするかは決め難い。二つの名詞の持つイメージは、ある点で帰一同化するものと思われるからである。芭蕉の句の中で、この両語を一句中に使っているのが見られる。『奥の細道』卯月朔日、日光での句に

あらたうと青葉若葉の日の光

中七において見事に詠まれている。『芭蕉句集』での中七・座五の解に

濃淡とりどりの緑の葉に降りそそぐ日の光

とあり、青葉若葉は濃淡の緑としての意に解されている。概して言え、若葉は芽の出かかった葉で柔らかく、青葉はその若葉の茂ったものである。新鮮さを出すには、やはり①を再案で成案と採るべきである。『奥の細道』の句を考え合わせるとこの句もいずれを採

っても良い句で、イメージの問題であり、同意語的な遊びである。

ロ 一句の対象に対する発想方法の変化によるもの

へ a・対象の具象化

④① いざさらば雪見にころぶ所迄

翁 花摘陸奥衛・泊船集・四山集

② いざ行む雪見にころぶ所まで

笈の小文 曙野

③ いざ出むゆきみにころぶ所まで はせを 真蹟

上五のみの推敲である。この句について『其法師』に明快率直な表現を賞美しているところある（注4）。散文的以前に、まだ口語的一句であると思われる。『其法師』にある「言葉をかざらず、すなほなる」をよしとするならば、果して詩的となり得るだろうか。心は素直なところに着眼点を置くとしても、言葉は詩的世界でなくては俳諧という文学には成り得ない。初案③の「出む」は、ある時点から外へと、まだ現われたばかりの状態で動性が小さい。再案②は③と比較して前方への進行性がある。しかも、③より語句のニュアンスが柔らかであり一句が滑らかである。三案で成案とされる①は②に対する因果的連想であり「行む」に対して「さらば」と対象の焦点を具象化している。しかも、そういう手法を探る事によって我々には②よりも③よりも、その情景が鮮明なものとして伝わってくる。しかし句としての構えの様なものがなく、その為か句らしからぬ感がしないでもない。この原因は、上五の「いざ」と推敲過程上二貫して変化が見られない感動詞の使用に原因がある。一句を鑑賞する時、あくまでも前向き姿勢で旅の心に燃えている芭蕉の姿が生きくゝと詠みとられるのも、この句の推敲が具象化の手段を採ってい

る為であると言える。また、この句に関しては、『笈の小文』出典の②が成案とされず①の異形句として掲げられている点にも注意したい。

⑤① 香を探る梅に藏見る軒端哉

笈の小文

② 香を探る梅に家みる軒端哉

笈日記 泊船集

中七の、しかも一語の推敲であるがこれも対象の具象化に属するものと思われる。初案②の「家」は漠然とした対象物であり、どの様な家か、これだけでは解し難い。再案で成案である①においては対象を絞って漠然とした家のイメージから藏のある家という所まで具象化されて行く。一句を解す上においても効果がある。切字「哉」が座五に位置する為に一句一章となり①②通じて句を流れのあるものになっている。①②共に問題となるのは季題の重複が見られるという事である。上五の「香を探る」と言う言葉に既に梅の香が裏付けされている。とすれば中七の「梅」と重複するのではないかと言う事である。

⑥① 旅寐してみしやうき世の煤はらひ

笈の小文 曙野

② 旅をしてみしや浮世の煤はらひ

泊船集 宇陀法師・世中百韻

上五のみに変化が見られる。初案②は「旅をする」と言う動詞に解し上五で切って考える事も出来るだろう。助詞「を」によって説明的、散文的な句になっている。「旅」という総体的な言葉よりも、再案で成案と考えられる①では「旅寐」として旅そのものの重量感が加わってくる。「旅寐」とする事によって一日一日の経過と、それに伴ったであろう事柄と喜怒哀楽をも推測できるのである。現実

っても良い句で、イメージの問題であり、同意語的な遊びである。

ロ 一句の対象に対する発想方法の変化によるもの

へ a・対象の具象化

④① いざさらば雪見にころぶ所迄

翁 花摘陸奥衛・泊船集・四山集

② いざ行む雪見にころぶ所まで

笈の小文(曠野)

③ いざ出むゆきみにころぶ所まで

はせを 真蹟

上五のみの推敲である。この句について『其法師』に明快率直な表現を賞美しているところある(注4)。散文的以前に、まだ口語的一句であると思われる。『其法師』にある「言葉をかざらず、すなほなる」をよしとするならば、果して詩的となり得るだろうか。心は素直なところに着眼点を置くとしても、言葉は詩的世界でなくては俳諧という文学には成り得ない。初案③の「出む」は、ある時点から外へと、まだ現われたばかりの状態で動性が小さい。再案②は③と比較して前方への進行性がある。しかも、③より語句のニュアンスが柔らかであり一句が滑らかである。三案で成案とされる①は②に対する因果的連想であり「行む」に対して「さらば」と対象の焦点を具象化している。しかも、そういう手法を探る事によって我々には②よりも③よりも、その情景が鮮明なものとして伝わってくる。しかし句としての構えの様なものがなく、その為か句らしからぬ感がしないでもない。この原因は、上五の「いざ」と推敲過程上一貫して変化が見られない感動詞の使用に原因がある。一句を鑑賞する時、あくまでも前向き姿勢で旅の心に燃えている芭蕉の姿が生きく」と詠みとられるのも、この句の推敲が具象化の手段を採ってい

る為であると言える。また、この句に関しては、『笈の小文』出典の②が成案とされず①の異形句として掲げられている点にも注意したい。

⑤① 香を採る梅に藏見る軒端哉

笈の小文

② 香を採る梅に家みる軒端哉

笈日記(泊船集)

中七の、しかも一語の推敲であるがこれも対象の具象化に属すものと思われる。初案②の「家」は漠然とした対象物であり、どの様な家か、これだけでは解し難い。再案で成案である①においては対象を絞って漠然とした家のイメージから藏のある家という所まで具象化されて行く。一句を解す上においても効果がある。切字「哉」が座五に位置する為に一句一章となり①②通じて句を流れのあるものになっている。①②共に問題となるのは季題の重複が見られるという事である。上五の「香を採る」と言う言葉に既に梅の香が裏付けされている。とすれば中七の「梅」と重複するのではないかと言う事である。

⑥① 旅寐してみしやうき世の煤はらひ

笈の小文(曠野)

② 旅をしてみしや浮世の煤はらひ

泊船集(宇陀法師・世中百問)

上五のみに変化が見られる。初案②は「旅をする」と言う動詞に解し上五で切って考える事も出来るだろう。助詞「を」によって説明的、散文的な句になっている。「旅」という総体的な言葉よりも、再案で成案と考えられる①では「旅寐」として旅そのものの重量感が加わってくる。「旅寐」とする事によって一日一日の経過と、それに伴ったであろう事柄と喜怒哀楽をも推測できるのである。現実

体験が対象物の具象化を促した推敲と言える。

⑪ 此山のかなしさ告よ野老廻

笈の小文

⑫ 山寺のかなしさつげよ癖ほり

笈日記泊船集・真蹟田中善助氏蔵

上五における推敲である。初案②の「山寺」と、再案で成案と考えられる①の「此山」は同じ意味でありながら語の持つ奥行きが異なる。①②共に詞書は菩提山で、菩提山神官寺を指している。一般に由緒ある寺、勅願によって建立された寺などの総称に「山」という呼称が使われるが、①の「此山」も詞書の寺が聖武天皇の勅願寺である事からして寺と言う意を含むものと解すべきだと思われる。

②が山の中に、ひっそりと佇んでいる化しい寺のイメージと結びつくのに対して、①は栄えた大寺院のイメージへと結びつく。勅願寺として栄えた寺院であったからこそ、荒廢の虚無感なるものは②よりも更に鮮烈さを極めてくる。故に②ではなく①にあって始めて中七の「かなしさ告よ」という語が生きてくる。今まで考察してきたⅢ・Ⅳの分類において対象物の具象化、焦点を絞る事によって一句の世界を作り得たのに対して「此山」の句にあつては、表面的には「山寺」から「山」へと山寺をも含む山そのもののへと対象の拡大であり、他の推敲過程と逆説の位置にあるものである。しかし、内容的には前述の如く「山」の語の意から更に深部を詠みとる事の出来る句形成過程を示している。より抜きんでた対象の具象化と言えるのではない。

へb・主観的把握から客観的把握への脱却

⑬ ①はしぎの闇をみよとや啼ちどり

はせを 下郷氏蔵真蹟
〔暗野・笈の小文・雑言物語〕

⑭ 星崎や闇を見よとともきこえぬ

泊船集

上五の助詞「の」「や」、中七の助詞「とや」「とて」、座五の変化と一句中全ての箇所推敲が見られる。先ず上五について、初案②は切字「や」を用い「星崎」という地名とそのイメージを強調している。再案で成案とされる①は格助詞「の」を用いる事によって句切れはないが説明的感を免れない。中七においては逆に②が接続助詞「とて」(格助詞「と」+接続助詞「て」↓格助詞の転)を用いるのに対して①は格助詞「と」+係助詞「や」を用い②の方が説明的である。更に②は中七の助詞に続いて座五にも「と」と助詞が使われており一句十七字中をこれだけの付属語が占めているのでは句意が浅く推敲の余地があるものと考えられる。しかも②においては俳諧の発句として欠くべからざる当季の季節が表面化せず、星崎と言う地名しかも千鳥の名所であると言う事を思い出さねば、この句の鑑賞が逸れる危険性を考え合わせると無季の②よりも①の「ちどり」と季節を持つ句に発句としての品位と格がある。更に、この句は座五に推敲過程の心理を最も顕著に見られる。それは②において主観的感情しか詠み得なかったのに対して、①では②から脱して客観的実在物、しかも当季の季節として一句に詠み得る事が出来たのである。この点に推敲過程が伺える。

⑮ ①冬の日や馬上に氷る影法師

笈の小文

⑯ ②冬の日や馬上に氷る影法師

如行子

⑰ ③さむき日や馬上にすくむ影法師

蕉 合歌のいびき

⑱ ④すくみ行や馬上に氷る影法師

はせを 笈日記泊船集

体験が対象物の具象化を促した推敲と言える。

⑪ 此山のかなしさ告よ野老廻

笈の小文

⑫ 山寺のかなしさつげよ癖ほり

笈日記泊船集・真蹟(田中善助氏蔵)

上五における推敲である。初案②の「山寺」と、再案で成案と考えられる①の「此山」は同じ意味でありながら語の持つ奥行きが異なる。①②共に詞書は菩提山で、菩提山神官寺を指している。一般に由緒ある寺、勅願によって建立された寺などの総称に「山」という呼称が使われるが、①の「此山」も詞書の寺が聖武天皇の勅願寺である事からして寺と言う意を含むものと解すべきだと思われる。

②が山の中に、ひっそりと佇んでいる化しい寺のイメージと結びつくのに対して、①は栄えた大寺院のイメージへと結びつく。勅願寺として栄えた寺院であったからこそ、荒廢の虚無感なるものは②よりも更に鮮烈さを極めてくる。故に②ではなく①にあって始めて中七の「かなしさ告よ」という語が生きてくる。今まで考察してきたⅢ・Ⅳの分類において対象物の具象化、焦点を絞る事によって一句の世界を作り得たのに対して「此山」の句にあつては、表面的には「山寺」から「山」へと山寺をも含む山そのものへと対象の拡大であり、他の推敲過程と逆説の位置にあるものである。しかし、内容的には前述の如く「山」の語の意から更に深部を詠みとる事の出来る句形成過程を示している。より抜きんでた対象の具象化と言えるのではない。

へb・主観的把握から客観的把握への脱却

⑬ ①はしぎの闇をみよとや啼ぢどり

はせを 下郷氏蔵真蹟
〔蘭野・笈の小文・雑言物語〕

⑭ 星崎や闇を見よとともきこえぬ

泊船集

上五の助詞「の」「や」、中七の助詞「とや」「とて」、座五の変化と一句中全ての箇所に推敲が見られる。先ず上五について、初案②は切字「や」を用い「星崎」という地名とそのイメージを強調している。再案で成案とされる①は格助詞「の」を用いる事によって句切れはないが説明的感を免れない。中七においては逆に②が接続助詞「とて」(格助詞「と」+接続助詞「て」↓格助詞の転)を用いるのに対して①は格助詞「と」+係助詞「や」を用い②の方が説明的である。更に②は中七の助詞に続いて座五にも「と」と助詞が使われており一句十七字中をこれだけの付属語が占めているのでは句意が浅く推敲の余地があるものと考えられる。しかも②においては俳諧の発句として欠くべからざる当季の季題が表面化せず、星崎と言う地名しかも千鳥の名所であると言う事を思い出さねば、この句の鑑賞が逸れる危険性を考え合わせると無季の②よりも①の「ちどり」と季題を持つ句に発句としての品位と格がある。更に、この句は座五に推敲過程の心理を最も顕著に見られる。それは②において主観的感情しか詠み得なかったのに対して、①では②から脱して客観的実在物、しかも当季の季題として一句に詠み得る事が出来たのである。この点に推敲過程が伺える。

⑮ ①冬の日や馬上に氷る影法師

笈の小文

⑯ ②冬の日や馬上に氷る影法師

如行子

⑰ ③さむき日や馬上にすくむ影法師

蕉 合歌のいびき

⑱ ④すくみ行や馬上に氷る影法師

はせを 笈日記泊船集

上五と中七に推敲の跡が見られる。四句を大別するとA列(初案②再案③、三案④)と、B列(四案で成案の①)の二分類となる。A列について、②は上五の助詞「の」を用いている為句切れなく一句一章となるが、やや散文的である。③④は共に、上五に切字「や」を用い座五に名詞止めと、二句一章の発句としての典型的句型を表わしている。A列では、「すくむ」「すくみ」「さむき」など主観的感覚語が一貫して使われ、その中でも③は上五の感覚に対して中七で反射的動作をも表現し散文的である。④は③の中七の反射的動作を上五に表わし、中七は「氷る」という冬ならではの自然現象を全く新しい感覚をもって詠み得たところに③よりも推敲が見られる。しかし、上五の破調(字余り)までして主観的語を脱しきれない点が更に①への推敲を促したと考えられる。A列は④によって漸く主観的レンズを外す事による視界の広がりを見い出したと言えるが、全体として句を見た時、まだ主観的レンズを外しきれないものがある事がわかる。それがB列①においては、主観的感覚語を自己の中に終う事により客観的に詠み得たのである。上五の季題、中七の「氷る」と言う対象物を越え、しかも的を得た新しい表現方法、A列②③と同様の前述の典型的句形。推敲によって正に発句と成り得たと言えるこの一句に、俳諧として鑑賞していられる安堵感なるものが微妙に伝わって来る。

②①丈六にかげろふ高し石の上

②丈六のかげろふ高し石の上

③丈六にかげらふ高し石の跡

笈の小文(小文庫)

芭蕉 笈日記

田中 薄助氏蔵真蹟

④かげろふに俳つくれ石のうへ

三冊子

一句中全ての箇所推敲が見られる。大別すると、この句も二分類される。A列(初案④)とB列(第四案で成案の①、三案②、再案③)である。A列は観念的世界であるのに対してB列はその対象を客観的世界において詠んでいる。しかも再案から既に客観的把握を成し遂げている所に、この句の詩作上の推敲速度が推測できると言える。『三冊子評釋』(次著)の中の「赤冊子」に①②④について述べられている。ここに抜粋すると、

④は懐古の情、自己の気持ちにつきすぎた。陽炎がそのまま尊像の姿をとってあらわれるように願っている。陽炎が丈六佛になりきっていない。

②は陽炎の中に既に丈六の尊像を感じとっている。①は②とは一字の相違で句の品位に大きい轉換が行なわれた。「高し」という語を生気あらしめる。丈六佛という観念を陽炎の後方にうすれさせていく。陽炎の客観的叙景が表面に生き／＼と生きてくる。観念の世界はなれ、実感的迫力を持ち、しかも句位を高雅ならしめている。

と評されていた。A列④は「石のうへ」に陽炎が燃えている。その陽炎に何か佛を見い出そうとしている。今見た陽炎に対して現実体験を瞬時にして詠み得た。即実即詠、加えて素直に思うがままを十七字の世界に収めた一種のインスピレーションであった。B列はA列の段階を踏襲しての詩作であるけれども既に佛は漠然とした佛ではなく丈六の高さを言い表わす事によって仏像の佛を陽炎に託して

上五と中七に推敲の跡が見られる。四句を大別するとA列(初案②再案③、三案④)と、B列(四案で成案の①)の二分類となる。A列について、②は上五の助詞「の」を用いている為句切れなく一句一章となるが、やや散文的である。③④は共に、上五に切字「や」を用い座五に名詞止めと、二句一章の発句としての典型的句型を表わしている。A列では、「すくむ」(「すくみ」・「さむき」など主観的感覚語が一貫して使われ、その中でも③は上五の感覚に対して中七で反射的動作をも表現し散文的である。④は③の中七の反射的動作を上五に表わし、中七は「氷る」という冬ならではの自然現象を全く新しい感覚をもって詠み得たところに③よりも推敲が見られる。しかし、上五の破調(字余り)までして主観的語を脱しきれない点が更に①への推敲を促したと考えられる。A列は④によって漸く主観的レンズを外す事による視界の広がりを見い出したと言えるが、全体として句を見た時、まだ主観的レンズを外しきれないものがある事がわかる。それがB列①においては、主観的感覚語を自己の中に終う事により客観的に詠み得たのである。上五の季題、中七の「氷る」と言う対象物を越え、しかも的を得た新しい表現方法、A列②③と同様の前述の典型的句形。推敲によって正に発句と成り得たと言えるこの一句に、俳諧として鑑賞していられる安堵感なるものが微妙に伝わってくる。

②①丈六にかげろふ高し石の上

②丈六のかげろふ高し石の上

③丈六にかげらふ高し石の跡

芭蕉

笈日記

田中善助氏蔵真蹟

笈の小文(小文庫)

④かげろふに俳つくれ石のうへ

三冊子

一句中全ての箇所推敲が見られる。大別すると、この句も二分類される。A列(初案④)とB列(第四案で成案の①、三案②、再案③)である。A列は観念的世界であるのに対してB列はその対象を客観的世界において詠んでいる。しかも再案から既に客観的把握を成し遂げている所に、この句の詩作上の推敲速度が推測できると言える。『三冊子評釋』(次著)の中の「赤冊子」に①④④について述べられている。ここに抜粋すると、

④は懐古の情、自己の気持ちにつきすぎた。陽炎がそのまま尊像の姿をとってあらわれるように願っている。陽炎が丈六佛になりきっていない。

②は陽炎の中に既に丈六の尊像を感じとっている。①は②とは一字の相違で句の品位に大きい轉換が行なわれた。「高し」という語を生気あらしめる。丈六佛という観念を陽炎の後方にうすれさせていく。陽炎の客観的叙景が表面に生き／＼と生きてくる。観念の世界はなれ、実感的迫力を持ち、しかも句位を高雅ならしめている。

と評されていた。A列④は「石のうへ」に陽炎が燃えている。その陽炎に何か佛を見い出そうとしている。今見た陽炎に対して現実体験を瞬時にして詠み得た。即実即詠、加えて素直に思うがままを十七字の世界に収めた一種のインスピレーションであった。B列はA列の段階を踏襲しての詩作であるけれども既に佛は漠然とした佛ではなく丈六の高さを言い表わす事によって仏像の佛を陽炎に託して

の世界で鑑賞しても或るいは詞書を加えても解し難い句であり、地の文を読んで始めて解せる句であつて未だ十七字の発句にすら収めきれない未完成的な点にその原因があると言えよう。またこの句①は形容詞語尾「し」が切字となつて二句一章を成している。

②①草臥て宿かる比や藤の花

芭蕉笈の小文・葛の松原

②ほととぎす宿かる比の藤の花

惣七宛書簡

上五の詩作上の発想法の違い、中七の助詞の変化の二箇所に推敲が見られる。初案②は上五「ほととぎす」↓夏、座五「藤」↓春と季題の重複で有名な句である。①②についての評解があるので、ここに抜粋すると、

芭蕉が一層に作句を催された感興の世界へと深まつて行き、その結果として「ほととぎす」を捨てて「草臥て」とおきかえたものと感ぜられる。(略)「ほととぎす」では藤の花と季感が重複する。句の中心が二つに分裂して何れに焦点が定められているか迷ふやうな句となるので再考したものと思ふ。(略)「宿かる比の藤の花」に力点おけば黄昏に疲れた足を引く際のけだるい感じが眼目となる。それを素直に取りつくるはず「草臥て」と打ち出し一句にしっかりとした緊密性をあたえた。「三冊子評釋」「赤冊子」とある。これに付言すると②は季感の重複を無視すると詩的であるのに対して①は現実的実感語をそのまま表現し詠み得ているだけに未だ俗の域であると言える。②から①への過程は実景の描写に自己の感情を移入できた時点までである。中七の助詞に関しては、②が格助詞で連なっている為に一句一章を成し①は切字「や」を用いて

二句一章となつてゐる。

②①さびしさや華のあたりのあすならふ

はせを
〔陳奥衛・泊船集〕

②日は花に暮てさびしやあすならふ

笈の小文

上五・中七に異形が見られる。「芭蕉句集」では成案に『笈の小文』出典を採らずに『笈日記』出典の句が採られている。出典の成立順では『笈日記』『泊船集』『陸奥衛』『笈の小文』となり②が最も遅く公表された句であるが句形からすると初案と考えられる。②の上五・中七の表現法、特に上五は発想的に逆をとっている様な表現に詩的なものを感じるが、中七に続けるとなると上五の助詞が目障りとなる。日が暮れるという自然現象に対して抱く寂寥感、現象と感覚の因果的な二物を一句中に出した為に散文的なものとなつてしまつてゐる。①は上五に感覚的語を用い、切字「や」で二句一章を成し、加えて座五の名詞止めで典型的句形となつてゐる。①②通じて、花に並ぶすあなるふの夕景の寂寥感を詠んでいるが、その寂しさを出すのに「さびし」と言う語をそのまま使い、主観的感情を脱しきれない所に句の未完成さ・推敲不足が伺えるように思える。

②①扇にて酒くむかげやちる櫻

笈の小文

②扇子にて酒くむ花の木陰かな

翁 駒歌

一句全てに変化が見られる。初案と考えられる②は、長閑かで麗らかな春の日に桜花爛漫、既に時をはずし、落花の頃の句であるのだろうか。万葉の花の梢から、ひら／＼と散るその木の下で扇を広げて酒を酌む所作をすると言う風情ある一句である。「扇子」も「扇」も同じ意ではあるが、能・狂言の所作「扇にて酒くむ」のイメージ

ジに結びつけるには、やはり②ではなく①でなくてはニュアンスが異なる。②は切字「かな」が座五に位置している為、一句一章のゆったりとした調べを持っている。②では情景の写生句としか受けとめられないのに対して再案で成案である①には②から更に一步躍んであるものがあると思える。それは、長閑かなこの美しい一時に私達が戯れ事をしている間にも美しさは留まらず自然は転変して行く、と解して情景を通して鋭く人生を凝視した芭蕉の人生に対する無常観・人の儚さ、美的なものの儚さ、その哀愁を十七字の世界に収めたと言えるのではないか。その意味で情景から心の移入を可能にした句である。この句①においては問題点がある。上五の「扇」↓夏、座五の「櫻」↓春、と季題の重複が見られる。

ハ 一句中の俗語を正したものの（理からの脱却・詩的世界への導入手段）

図① 枯芝ややゝかげろふの一二寸

笈の小文

芭蕉・嘯野・泊船集・蕉翁句集

② かげろふやまだかげろふの一二寸
中七の「まだ」と「やゝ」との語句のもつ意味上の推敲である。初案②の「まだ」は、その時に至らないで今なお、と言う意味合で表現方法は理に適った俗語である。一二寸の仄かな陽炎を見て早春さえ遠いと言う一種の焦燥に駆られた様子が伺える。再案で成案である①は漸くと言う意に期待していたものが、やっと現われた、と対象物に対する優しさがある。②の俗語を詩的・俳諧的語句に近づけたと言える。この僅かな副詞にも神経を行き届かせ俗語を正した芭蕉の心情が察せられる推敲句である。①②共に、上五の切字・座五

の名詞止めと、これも典型的句形であった。

図① 雲雀より空にやすらふ峠哉

笈の小文

② 雲雀より上にやすらふ峠哉

嘯野・卯辰集・小文庫

中七の一語の置き換えである。②について、

「上に」ではあまりに平板であり、『嘯野』の杜撰を諸集踏襲したか。〔芭蕉句集〕

と頭注がある。②は楽しく歎喜に満ちて鳴く雲雀よりも上に、確かに「上」に位置しての吟詠である。事実そのままを句にすると理が強く利き過ぎる。再案で成案である①は「空」と言う語に、②の意と更に「空」自体のイメージが加わって②以上の詩的広がりがあり理から脱した推敲と言える。

以上、三分類に大別しながら推敲過程を考察して来た結果、

分類Ⅰに属す句：三句

分類Ⅱに属す句：一句

分類Ⅲに属す句：三句

Ⅲ(イ)九句
Ⅲ(ロ)十一句
Ⅲ(ハ)二句
Ⅲ(ニ)二句
Ⅲ(ホ)四句
Ⅲ(ヘ)三句
Ⅲ(セ)四句

と右記の如く句数的には圧倒的に分類Ⅲが多く、相当数を隔ててⅠ・Ⅱの順になっている。この推敲過程において、どの分類が最も初歩的推敲段階かと問われれば即答はし難い。何故ならば、一句毎の出発点が必ずしも同一線上に始まるものではないからである。しかし、今まで考察してきた異形句は共に一紀行上にあるもので以前の貞門、談林から天和調への様な大きな詩作上の起伏は無く、出発点においてもそれ程、振幅は見られないので敢てこの場で段階的位置づけをし、更に創作時期を考察して行く。

分類を更に大別すると、手段・方法を採って推敲して行くⅠ・Ⅱに対して、手段として語句を変化させてはいるものの更に根本的に変えようとするⅢとに分かれる。表記的面での推敲がなされるⅠ・Ⅱの方がⅢよりも初歩的と言える。

Ⅰについては、助詞の省略、一般的助詞から切字になり得る助詞（係助詞・格助詞）への推敲が見られた。句の『笈の小文』紀行文中の位置づけをすると、三句（〔1〕〔2〕〔3〕）とも全て「須磨」の句であった。「須磨」の句については綱島三千代氏の「『笈の小文』成立上の諸問題」（『日本文学研究資料叢書』所収）において、

『曠野』所収の句が旅行のほぼ全域にわたっているのに、須磨の句だけは一句もないことである。（略）『曠野』に収録されていないのは、前述の猿雖宛書簡に、須磨の記述が中心をなしながら、須磨の句の記されていないことを考えあわせると、貞享五年秋までに、これらの句が未だ作られていなかったためではあるまいかと思う。

と、その成立を考察された論文がある。綱島氏が「曠野」に「須磨」の句が収録されていない事を論証され、また『猿蓑』で須磨の句一句初出（蛸壺やはかなき夢を夏の月）する事を掲げておられるが、この句は異形句の存在しない句であった。『笈の小文』本文には「須磨」と詞書ある句から七句（〔4〕・海士の顔先みらるゝやけしの花・〔2〕・ほととぎす消行方や島一つ・〔3〕・蛸壺やはかなき夢を夏の月）詠まれている。その中で異形句を持つ句は四句（〔1〕〔2〕〔3〕〔4〕）あり、その四句のうち三句まで（〔1〕〔2〕〔3〕）がこの分類Ⅰに属する

のである。残り一句（〔4〕）は分類Ⅱに属す句である。しかも、これら四句の異形句を持つ句は全て、芭蕉生前の撰集などには一句も収録されていない。綱島氏が指摘された『猿蓑』『けし合』に各々一句ずつ（蛸壺や／海士の顔）収録されているのは異形句のない句であり芭蕉生前に須磨の句を収録する唯一の撰集である。芭蕉没後初出する須磨の句は二句（〔1〕・ほととぎす）『芭蕉庵小文庫』に見られる。分類Ⅰの三句は全て助詞に異形が生じている点に分類規準を置いたものであるが、前述の撰集収録上から、これら異同ある句を見る時、信憑性に欠けるのである。一字の助詞は最も誤伝しやすい対象であるとも解せるからである。『芭蕉句集』には〔2〕の異形句を誤伝かと疑う注がある。しかしながら分類Ⅰで考察してきた助詞については助詞の省略・置き換えなどによつていずれも明らかに推敲の形跡が見られた。また出典撰集を見ても異形句を収録している撰集は成案と認めた句（ここでは成案が全て『笈の小文』収録の句であった）を収録しているものよりも時代の早いものであった。故に助詞にのみ変化ある異形句は全て誤伝とは言い難い。綱島氏の前提論文によれば、

紀行の須磨の条の現在の形が成立したのは、『猿蓑』の成立とあまり隔たらぬころであったはず……

とある。これを更に絞って『猿蓑』の歌仙が巻かれた元禄三年十月頃から『けし合』が刊行された元禄五年頃までに須磨の句が形成されたと見るべきであろう。何故、この須磨の句のみ『笈の小文』の旅となった貞享四年・貞享五年から時を隔てて形成されたのである

うか。これは当時の俳壇を考える時、『笈の小文』においても顯著に見られるが、尾張鳴海、蓬左（熱田・名古屋）、伊勢などにおいてはその先々で歌仙を巻いている（注⁵）。或るいは単に挨拶句として（発句と脇のみ）だけで歌仙を巻いていない句（注⁶）もあるが、挨拶句である以上、自然詠の中に相手（亭主）に対して何らかの心遣い・思いやりを含んでいる。また歌仙を巻く上にあつては懷紙に硯をひらいて自己の思考のみ吟詠するものとは自ずからして句そのものが違ふであらう。何よりも対象である座の連衆に対して一句は音として聴覚に先ず入つて来る。一座を設ける上にあつては当然、記録する執筆も居たであらう。音として発表された句は執筆によって文字に表わされ撰集として世に公表されて行く。座を媒介として、出発点は個々の魂からのものであつても他人を通じてその一句は既に一座する者の句となる。故に自己の意志のみに左右されず句は公表され、従つて句形成過程が早いと言える。逆に歌仙を巻く場（機会）を与えられず懷紙に留めるのみの句は形成過程が前者よりも遅れるとする事が言える。更に歌仙を巻かれた句にあつては、紀行構成の手段として引き合ひに出される俳文が見られない点にも注意したい。一体、芭蕉における俳文は、どの様な意味を持つものであつたのだろうか。単に句の詞書ではなく、それ自体に、屢、文学的価値が高いと評されているものである。歌仙との関連性がある様に思われる。ここでは俳文そのものの考察ではないので問題点に留めておく。前述の句形成上の歌仙の位置から考えても、須磨では一として歌仙は巻かれておらず、当時、俳壇も須磨・明石に皆無な点からして「須磨」の句が、より詩作の遅れた一因を成したものであると思われる。

磨」の句が、より詩作の遅れた一因を成したものであると思われる。

分類Ⅱについては、一句Ⅳのみであつたが、前述した様に、これが須磨の句である以上、分類Ⅰと同様な事が言える。

分類Ⅲでは更に三分類し詳細に見てきた。中でもⅠは私の鑑賞眼の拙さが災いした分類とも言えるが、ありのままに考察して行く。分類Ⅰ・Ⅱがいずれも表記面での異形であつたのに対して、分類ⅢのⅠは根本的発想の変化であると言える。またⅠ・Ⅱが須磨の句を占めているのに対してⅢは、須磨以前、大坂までの句（正確には奈良・唐招提寺までの句に異形句が見られる）であり、よつて根本的発想の変化に至る推敲句は『笈の小文』全篇には見られず一貫した紀行文としては推敲度が大きく二分されるものであつた。故に、一文学作品として見る場合にも推敲過程に、むらがあると言える。

Ⅰは紀行文中（須磨除く）ほぼ全般に点在する。初出は貞享四年一句¹²、元禄四年一句¹⁰、元禄八年三句⁸⁹¹³、元禄九年一句¹¹であつた。いずれの句も言葉の遊びとしか鑑賞出来なかつたが、その遊びによつて表面的には推敲されたと考えられる句ばかりである。

これは詩歌全般と散文との間に一線を画すとすれば、そこには韻律の効用とも言うべきものがある。これと同様に発句自体にもそれぞれ韻律がなくてはならない。その韻律を句に表現するには言葉の選択しか方法を持たない。（俳諧における定型十七字、季題、切字も韻律的效果の一因であるが、Ⅰの分類は根本的要因で、定型を成すそれ以前の分子である。）言葉の選択は、それが同意語である以上

その地点より抜けきれない。やはりそこは同一世界、同一観点での世界でしかない。それ故、言葉は遊びとしか考えられず韻律的効果のみを句に裝飾する。この点に推敲らしからぬ推敲の初期段階が伺われる。

ロはⅢの分類中、過半数を占めている。ロは対象物を異質観点から推敲したものと言える。推敲過程上、優れた飛躍的進歩である。観点を変える事は、詩作・創作一般を通じて何らかの精神的自己犠牲があり、故に困難であり、そういうものであるからこそ、より高度な方法であると思われる。ロを更にa・b・cと分類したので順を追ってまとめる。aは初出元禄二年二句^{四四}、元禄八年二句^{四五}であった。紀行文中は伊勢までの句で吉野からの句には、この方法は採られていない。対象物の具象化は中世的象徴主義精神を根底に持つ芭蕉にあつては脱の境地と言える。脱の境地こそ近代的写実主義精神なるものの世界であり、早くも、ここにその現れを見る事が出来る。

松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも、私意を離れよといふことなり。この習へといふところをおのがままに取りて、終に習はざるなり。習へといふは、物に入つてその微のあらはれて情感するや、句となるところなり。『三冊子』

「赤冊子」

有名な芭蕉の俳諧観である。『私意私情を捨て対象と同化融合する時、真の俳諧が生まれる』と持論を打ち出した。この私意を離れよと明確に言い放つ事が出来たのは、いつの頃であつたのだろう。俳

文にあるこの文も同一内容だと思われる。次に掲げると、

古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實としる事をよろこべり。『韻塞』『其詞』

この俳文は『韻塞』『許六離別ノ詞』に続いて収録されている。「許六離別ノ詞」の終わりに「元禄六孟夏末」と記されており、この俳文が『三冊子』の「私意を離れ」と内容的に似かよっている事を考え合わせ、この持論の確立は、ほぼ元禄六年四月末と変わらぬ頃であつたと考えられる。分類aに戻つて、対象物の具象化は換言すれば「物に入」る事にある。物を知らなければ具象化は出来ない。また物を知るにはその物に入らなければ知る事は出来ないのである。aの段階では高度な俳諧芸術理念とは距離がある。まだと言う感が強い。今一度aの句を見ると^{四四}「いざ出む」↓「いざ行む」↓「いざさらば」、^{四四}「旅をして」↓「旅寐して」とそれぞれ出立・旅を現実体験し、その中に自らをおく事によつて概念ではなく具象性をもつて推敲された。aの段階で成案と認められても他の分類段階に置き換えると推敲不足である。aでは前掲の芭蕉俳諧論「私意私情を捨て対象と同和融合する」初段階であると言える。bにおいてはaよりは対象と同和融合を成し得たと言える。主観的把握から客観的把握への脱却を旨とす分類bの句について先ず初出を見ると貞享四年一句^{四九}、元禄二年一句^{四八}、元禄八年一句^{四〇}、であり紀行文中前半に位置し、鳴海・あまつ縄手・伊賀での三句であつた。自然・絶景などに接した時、人はその感情の進りを詠まずにはいられ

ず歌に託した。万葉集など古代歌謡には、そういった主観的感情を詠んだものが多い。人にとっては当然の情である。芭蕉の句も時として同様な事が言える。芭蕉は、しかし一点に止まらず彼にあっては脱主観的詩界が広がったのである。bにおいて考察してきた様に凍てつくような寒い冬の日を表現するのに「さむき」「すくみゆく」と主観的語を連ねても、たとえその寒さは詠みとれてもそれ以上の広がりは持たない。それら主観的語を捨て「氷る」「冬の日」という自然現象を客観的に写しとる事によって、或るいは客観的語を用いる事によって鑑賞者には無限の世界が広がる。詩作者の感情が入れば少なくともその感情に左右され詩界はより小さくなり感性のみに語りかける。客観的に対象物を捉え、あるがままの状態を詠めば鑑賞者は詩作者という一個人を媒介とせずそのものに出会った事となる。その感動は、詩作者が持ち得た感動と、やや条件的ギヤップはあっても主観導入という一個人のレンズを通して見るものよりは新鮮である。感性のみに語りかけていたものが、ここに至って感性に訴え、且つ知性に訴え、鑑賞者が持つ最大限の創造力を持つて鮮明な画像として心にくい込むのである。cについて、初出は貞享四年一句四、貞享五年一句四、元禄八年一句四、刊行年不明出典『駒撮』四、で、この中に「吉野」の句が二句見える。この分類cの情景から心境への移行は一見してa bと相反する感がある。では句として、a・bよりも以前の段階だろうか。思うに芭蕉が元禄六年に前掲の高度な芸術理念に辿りつくまでの段階で単に客観的世界を保持するだけでなく、その世界に自己の直情をも時として許容

したのではないか、と言う事である。故にcをⅢの分類にした。ハは、一句中の俗語を正したもので初出は二句四四とも元禄二年であった。

師のいはく、俳諧の益は俗語を正すなり。つねに物をおろそかにすべからず。このことは人の知らぬところなり。大切のところなりしと伝へられ侍るなり。『三冊子』『黒冊子』

俳諧観の一である。俳諧としての体を成す上の手段と言える。俗語を正す事から始まって、俗語を正す事に終わるものが俳諧かも知れない。分類ハは、前述の分類イと同一線上にある。それはイ・ハ共に俳諧の俳諧たる体をなす為のⅠ・Ⅱより高度な手段・方法であった事に起因する。以上まとめると

(1) 分類Ⅰ・Ⅱは共に須磨の句のみに見られる推敲で、表記上一部の異形に留まり発想の推敲までは成し得なかった。

(2) 分類Ⅲにおけるイ・ハは共に句形成の手段であった。ロはⅢの句の過半数を占め、分類中とりわけ高度な推敲テクニックであり更にaからbへと芭蕉の芸術理念に近づいていると言える。

二 破調についての考察

延寶末年から天和にかけてのいわゆる「天和調」(虚栗調)の俳風模索時代に旧派否定の為の手段として芭蕉が採ったのは五・七・五定型の否定、倒置表現、漢詩的境地への導入がある。中でも定型否定は字余り、字足らずと一句に破調をきたし、句であって、もはや句ではなく散文的である。芭蕉をして或るいは俳諧の発句を代表する

秀句として引き合いに出す時、それは「閑かさや」「夏草や」「五月雨の」句であり、それらは全て定型に詠みこまれている。天和調のもとにあつての定型が否定されたとはいへ究極は俳諧芸術上、最も適した詩型として肯定されている事が前述の秀句にも顕著に見られる。芭蕉における破調は、自ら規則を破る事によつて規則の意を解し得る事が出来たマイナス面からの効用であつたと言える。それ故、破調は句形成上初期の段階ではないだろうか。この観点から紀行文を見れば、芭蕉紀行文全体の位置づけ、更に『笈の小文』の位置づけが出来る様に思えるので地の文の意識は一まずおいて五大紀行文の発句の破調を順追つて述べてみる。

(一)『野ざらし紀行』における芭蕉発句総数四十五句、うち破調の見られる句十六句(注と全体の約半を占めている。破調箇所は上五に十一(1・11)注7参照以下同じ)句、中七に八句(5・6・9・11・12・13・14・16)、座五に二句(14・15)、その中でも上五・中七に重複して破調の見られる句四句(5・6・9・11)、中七・座五の重複一句(14)。破調と言つても字余りで一字の字余りから三字にまで及んでいる。

(二)『鹿島紀行』における芭蕉発句総数七句、破調は皆無。

(三)『笈の小文』は(一)推敲過程で述べた如くである。破調は四句。

破調箇所は上五に三句、中七は皆無、座五に一句。上五の字余り(一)つぬいで後に負ぬ衣がへ・月はあれど留守のやう也須磨の夏・須磨のあまの矢先に鳴か郭公)は三句とも座五が名詞止めである為かあまり気にかからない。座五の一句(行春にわかぬ浦にて追付た

り)は動詞+助動詞で終わっている為か散文的感を免れない。この句に關して仁枝忠氏『芭蕉に影響した漢詩文』十四において、

私はこの「追付たり」の典故を『唐詩選』に見える張説の「蜀道後期」と提する詩であらうと考へてゐる。即ち客心争日月・来往預期程。先至洛陽城。(略)全く張説の「秋風不相待」を裏返しにして俳句に譯したものと言ふべきであつて……

と漢詩の影響を説いておられる。この論については芭蕉の漢詩的教養、当時の漢書等の点から典拠に問題があるが單に漢詩の影響とすれば天和調の破調の多くが漢詩的境地を俳諧に吹き込む為の手段であつた様に、この破調も同様な事が言える。しかし天和調のそれと比較すると漢詩の持つあの途切れ／＼のような堅さはもはやなく既に日本的詩調として詠み得ていると言える。全体として四句の破調を見ると紀行本文中末尾にあり、しかも二句までが「須磨」の句であつた。

四『更科紀行』における芭蕉発句総数十一句、破調は皆無。

(四)『おくのほそ道』における芭蕉発句総数五十一句、破調は上五に見られる三句(笈も太刀も五月にかざれ帯職・あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ・塚も動け我泣聲は秋の風)のみ。中七・座五は皆無。

(一)から(四)までの紀行を総体的に見ると先ず気付く事は、紀行文におけるいわゆる地の文と発句とに關して(一)(四)は程度の差こそあるが融合している。これに対して(二)(四)は紀行文自体も短かいものであつたが、地の文を書き終えてから発句をまとめて書いた感の強いものであつた。これは紀行文としては初期段階である。しかも発句数

も少なく、また破調は見られず紀行文としての実質的破調考も(一)(二)(三)の三大紀行の考察と言える。この三大紀行は二分類されと言え(四)る。(一)に対して(二)(三)である。紀行文中発句のきを占める破調、三字に及ぶ字余り、上五・中七・座五と全ての箇所数句あり、一句中二箇所破調の重複とも言うべき句が五句ある。正に破調がそれと一目で解せる(一)が天和調の俤を多分に持つ初期段階であるのに対し、(二)は(一)から大幅な減少である。句数の上のみならず字余りが三字にまで及んだ(一)に比較すると僅かに一字の字余りであり表現上の様に詠む事しか出来なかったと許容し得る破調である。破調箇所も上五・中七と二箇所減り、(三)においては上五のみ見られる。ここに至って(三)は紀行文として見る時、芭蕉紀行初期の(一)に近いものではなく、(四)の紀行文としても蕉風文学としても重要な位置を占め生涯の傑作とされるものに近いと言える。よって文学的価値も(四)に近いと考えられる。しかし、ここで付記すると(三)の破調が紀行本文中末尾にあり「須磨」の句が二句占め、前述の如く破調そのものが初期段階のものである事、また一(推敲過程に見る句の位置)で考察してきた事、以上を考え合わせると(三)は一貫した紀行文ではなかったと言える。

おわりに

観点を交えれば分類が崩れると言う危険性を伴いながら自分なりに推敲過程に見る句、更に破調考と未定稿『笈の小文』の位置を考察し問題提起に終わったものも少なくはないが、一・二で述べてき

た如く「須磨」の句とそれ以前の句との間に一線を画し一貫した紀行文とは言い難いが一紀行としてみた時『奥の細道』に接近したものであったと言えよう。

註

(1) 芭蕉の切字観は『去来抄』『三冊子』などに見られる様に従来の切字説否定独自のものをもっていた。「第一は切字を入れる句は句を切るため也。切れたる句は字をもつて切るに及ばず。いまだ句の切れる、切れざるを知らざる作者のため、先達切字の数を定められたり。此字を入るときは十に七八は句切る也。残二三は入てきれざる句あり。又入れずしてきれる句あり。此故に或はこのや、は口あいのや、このしは過去のしにて切れず或は是は三段切、是は何ぎれなどとして名目して伝授事なり」『去来抄』

「切字に用る時は、四十八字皆切字なり。用ざる時は一字もきれ字なし」『去来抄』

「切字を加へても付句の姿ある句あり誠に切たる句にあらず。又切字なくても切る句有。其分別切字の第一也。その位は自然としらざればしりがたし」『三冊子』『白冊子』

(2) 諸家が「野ざらし紀行」の旅においての句「野ざらしを心に風のしむ身かな」と、『笈の小文』の「旅人と我名よばれん初齊」を比較してわかるように後者には前者のような心細さはない。旅そのもののへの観念が違い、後者には余裕がある」と説かれる。その様な解し方。

(3) ⑨の詞書、②↓「二乗軒」③↓「二乗軒と云草庵會」とある

(4) 「只句は本体は意味を一として作を二とし、言葉をかざらず

すなはなるをはいかいと云べきにや。いざさらば雪見にころぶ
所迄芭蕉の句ぞ慕はるゝ物なれ。人丸・西行・其也古人の歌に
言葉おほくたくみたるはなし。自然の風情自然の意味本心の誠
かたまつて三十一文字になりぬ。俳諧何ぞかはるべき。是を以
て好人多^{おほく}して楽人^{おもしろ}すくなし」『其法師』(瓊海)

(5) 岩波古典文学大系『芭蕉文集』54、55頁頭注・補注参照

(6) 「香を採る海に藏見る軒端哉」と防川への挨拶句

(7) 1 猿をきく人すて子にあきのかぜいかに

2 みそか月なし千とせの杉を抱あらし

3 いもあらふ女西行ならば歌よまん

4 僧朝顔幾死かへる法の松

5 礎打てわれにきかせよや坊が妻

6 露とくく心見にうき世すゝがばや

7 御廟年を経てしのぶは何をしのぶ草

8 狂句風の身は竹斎に似たるかな

9 つゝじいけて其陰に千鱈さく女

10 命二ツ中に活たるさくらかな

11 牡丹薬ふかく分ケ出る蜂の名残かな

12 馬に寝て残夢月遠しちやのけぶり

13 草まぐら犬もしぐるゝか夜の聲

14 海くれて鴨の聲ほのかに白し

15 なつ衣いまだ虱をとりつくさず

16 手にとらば消んなみだぞあつき秋の霜

(8) 14の句は中七字足らずであるが、この句は座五が七とあり中

七・座五の転倒であり字足らずの部類には属さないとと言えるだ
ろう。

付記

1 推敲過程と言っても異形句のみの考察で別案(例「月見ても

物たらはずや須磨の夏」の別案)も一種の推敲過程と考えられ
るのに省略した。

2 句の成立年時の傍証や俳書・撰集の類の信憑性の問題につい

て本文中でふれえなかった。

右の二点に関して紙数の都合上、又、時間的余裕のなさから不
備のままに終ったが、今後の問題として考えていきたいと思う。

ただ、主観的な鑑賞におわらなかつたかとおそれる。